



ほんよも

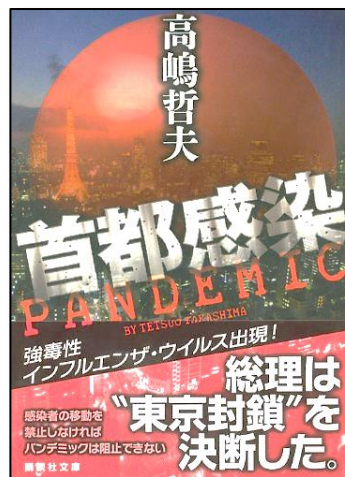
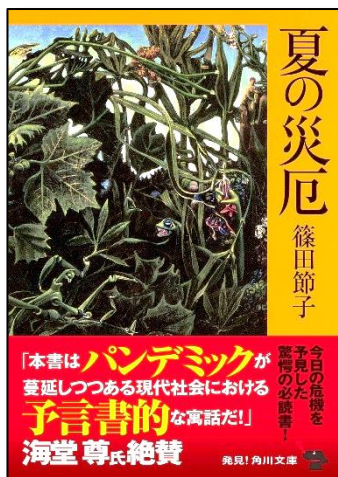
No. 006



コロナ禍における読書について。

桂陽生のみなさんこんにちは。最近の図書室は、本を読みに来る人もいますが、自習室代わりに利用している人も多く、嬉しい限りです。涼しく静かで机も大きいので、勉強がはかどると思います。参考書や辞書類も置いてありますので、どんどん使ってください。もちろん、本を借りに来る人はいつでも大歓迎です。近いうちに、今年度第2回目の購入希望図書を募ります。入れてほしい本があれば、図書室内のリクエストボックスに。

さて、このコロナ禍は出版業界にも影響を与えています。感染症対策について書いたものや、「コロナ後の世界はどうなるか」といった本が売れています。今までは数が少なかった、Zoom の使い方を書いたマニュアル本も多数出版されました。



小説では、コロナ前に書かれたウイルスを題材とした作品が再評価され、書店に平積みになっています。本校の図書室にも何冊か入っています。関心のある人はぜひ読んでみてください。今日はその中から一冊を紹介します。

～中国発の新型インフルエンザが全世界に広がる～ 『首都感染』 高嶋哲夫

内容・あらすじ

20××年、中国の北京ではサッカー・ワールドカップが開催されていました。

しかし、スタジアムから遠く離れた雲南省で、致死率 60%という、強毒性のインフルエンザが出現します。

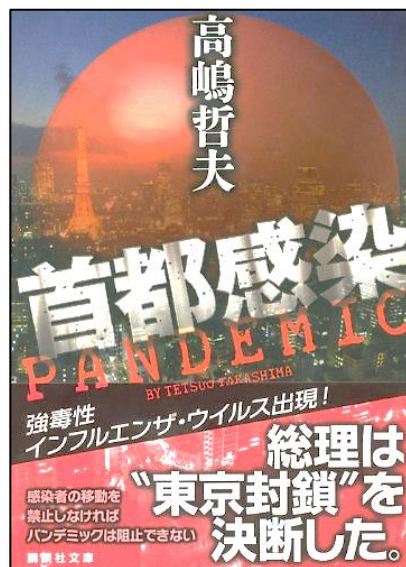
ワールドカップを成功させたい中国はギリギリまで発表を遅らせ、ウィルスを封じ込めようとしませんが失敗。

ウィルスは北京にも広がり、選手にも感染者が出始め、ワールドカップは決勝戦の直前で中止に。

中国から帰国した選手やサポーターがウィルスを自国に持ち帰り、世界中で感染が広がります。

日本も例外ではなく、中国からの帰国者を隔離して対応しますが、次々と感染者が出る事態に。

死者も増え続け、「このままでは日本が全滅してしまう」と危惧した政府は、ある思い切った決断に出ます――。



川口先生の感想

2010年に書かれた小説なのですが、まるで今の状況を予言したかのような内容で話題になっている本です。

序盤までは今とそっくりです。発生源が中国から、というのも全く同じ。コロナ禍でよく聞くようになったワードもたくさん出てきます。「封じ込め」「隔離」「検疫」「不要不急の外出」「自粛要請」などなど……。

違うのは、このウィルスが致死率 60%という点です。新型コロナウイルスどころではない強毒性ウィルスが猛威をふるい、お医者さんや看護師さんも疲弊し、病院は修羅場と化します。ウィルスが変異してしまい、タミフルも効かなくなる始末。全く打つ手がありません。

そして追い詰められた総理大臣は、批判覚悟でかなり思い切った措置を取ります。事の重大さをわかっていない閣僚や野党議員たちを押し切って決断するのですが、「今の政治家たちにここまでできるかな……」と思ってしまいました。

今後、新型コロナウイルスを上回るウィルスが出現することも十分にあり得るので、シミュレーションとしても読む意義がある小説です。